

「聖餐の始まり」

キリスト教に限らず、ほとんど全ての宗教には「伝統」と「儀礼」があります。それらをまとめてひっくるめて「お約束」と表現しても良いかも知れません。宗教には「お約束」が沢山あります。その歴史の中で、考案され、磨かれ、洗練されてきた「お約束」は、私たちの信仰を外側から支える大切なものです。だからこそ、私たちは、その「お約束」の目的と、その始まりをちゃんと知っていたいと思います。キリスト教における最も重要な「お約束」である聖餐式について、今日は、その最古の記録を見ていたいと思います。なぜ私たちはパンと杯を通して、イエス様の身体と血とを頂くという儀礼を守っているのか。「だって、そういうものでしょ」と言えてしまうくらい、大事で長い伝統を持つ聖餐式なわけですが、そこからさらに踏み込んで、とくに血が持つ意味に焦点を当ててみたいと思います。次週の聖餐式が、もうちょっとだけ嬉しく感じられるようになれば良いなあ、と願っています。

今日の聖書箇所は、イスラエルの民が神様との間で契約を結ぶ場面を描いています。この契約の儀式を取り仕切るのは、モーセさんです。モーセさんは、「主の言葉」と「献げ物」と「血」を用いて、儀式を進めていきます。とくに、「血」の用い方が特徴的で、最後、モーセさんは「血」を民に振りかけたと言います。いったい、どれくらい集まった民に、どれくらいの量の血を振りかけたのか。現実的に考えてみると、色々疑問も浮かんできますが、一つ言えるのは、それはある程度、衝撃的で思い切った出来事であったということです。私が、今、ここで血を振りまいたら、ビックリするじゃないですか。そんな感じです。

具体的に想像すると衝撃的な場面ですが、一方で、今日の礼拝とよく似ている部分もあります。それは、「主の言葉」と「献げ物」と「血」が、一つの儀礼の中で用いられ完結しているということです。これは、私たちが聖書を読み、御言葉に触れ、献金をして、聖餐に与るという流れと一緒にですね。実は、この太古の時代から、私たちの礼拝の形は、あまり変化していない、ということでもあります。この伝統は、昨今の宗教問題を考える上でも、私たちは自負して、誇っていいものだ

と思います。私達が信じて、行っていることは、3000 年以上の歴史を持つものであると。その辺りの年季の違いを分かってよね、と。

話しが逸れました。「血」のお話です。「血」の話というのも、不思議ですけどね。レビ記 17 章 14 節で「すべての生き物の命はその血である」と述べられるように、キリスト教の前身である古代ユダヤ教もそうでしたし、当時の周辺文化・宗教においても、「血」は「命そのものの象徴」でした。つまり、「血」を流すとは、「命」が流れ出ることであり、「血」を頂くとは「命」を頂くことでした。日本語でも何かに人生や命を懸けて取り組むことを「心血を注ぐ」と言ったりしますが、それと似たような感覚が、当時の「血」の理解にはありました。つまり、今日の聖書箇所 6～8 節において、モーセが「血」を祭壇と民とに振りかけるという描写は、「和解の献げ物」の「命」を使って、神様と民との間を橋渡しした、ということになります。目には見えない神様に血を振りかけることはできませんから、代わりに祭壇に振りかけたんですね。これも想像すると、なかなか凄い場面です。その聖餐桌を血で濡らす、今の敦賀教会のやり方ですと、ぶどうジュースを注ぐと言ったところでしょうか。

そうまでして、人々が求めたのは、神様との確かな繋がりでした。これは、宗教儀礼のもっと下にある、食えるとか、眠るとかという原初的欲求に近い、宗教以前の感情だと思います。人々は安心したかったんだと思います。ゆっくりと眠り、不安なく食事ができ、社会が平和にめぐり、穏やかな気持ちでその生涯を終えたいという、今も昔も変わらない最も基本的な願いを叶えたくて、人々は神様と繋がることを求めています。現代社会において、そうした基本的な願いを叶えるための手段は、たくさん用意されていますから、「血」による神様との繋がりなんてやり方は、ちょっと選択肢に上がりにくいかも知れません。でも、果たして、私たちに与えられている現実的な手段、可能な選択肢が、すべて無意味だと知らされた時、私たちは、その後、何を選び取るのでしょうか。

主を信じ、教会に集う私たちは、そこまで深刻な状況に陥る前に、神様に導かれて聖餐に与る者とされました。人の力では乗り越えられない困難に遭遇した時も、心が張り裂けそうな悲劇に落とされた時も、なお期待を忘れずに、その次を願い求めて、掴み取れるように、私たちは神様と繋が

ることを選択したのだと言えます。

しかも、私たちが今頂いている「血」は、動物の血ではなく、神様の子どもであるイエス様の「血」です。もちろん、それは象徴的な意味です。実際に、イエス様の血液を杯に入れて飲んでいるわけではありません。それでも、古来の「血」の儀礼と同じ願いを持っています。「神様と繋がりたい」という願いを、今は、イエス様の助けを借りて、イエス様の血によって、実現しているわけです。これは、ある意味、とても合理的な発想でもあります。神様は目に見えない、触れられない、この世に存在しているのか、どうかも、上手く説明できない。一方で、イエス様は 2000 年前にお生まれになったことが確認されています。まあ、この点に関しても、異議申し立てしようと思えば、ツッコミどころは多々ありはしますが、「神様に直接出会った」という証言の弱さと少なさに比べると、検討に値する信憑性を持っているんじゃないでしょうか。少なくとも、イエス様が存在していないなら、キリスト教は存在してないわけですから。似たような宗教は生まれていたかも知れません。でも、キリスト教の根幹である福音書も色々な手紙も、イエス様の存在が大前提です。

信仰的な意味でも、現実的な意味でも、イエス様って、私たちと神様を繋ぐ架け橋なのです。理性では捉え切れない神様というおぼろげな存在を、神様と人の中間に位置されるイエス様がクッキリハッキリさせて、私たちに「神様を信じられる力」を与えてくださっている。私達は聖餐式において、イエス様の「血」を、杯を通して頂くことで、その杯と口が触れる感触、舌に感じる温度や味、喉を降りて行く感覚によって、具体的に神様との繋がりを再確認しているということです。確かに「御言葉」によって信仰に導かれ、信仰を強められるのは良いことです。でも、「それじゃ足りないでしょ？」ということを神様は御存じなのでしょう。だから、古来、「主の言葉」に合わせて、「血」を用いるという鮮烈な方法で、人々は信仰を再確認し、神様との関係性を思い出してきたのです。実は、イエス様ご自身も、今日の聖書箇所を意識されて、ルカによる福音書 22 章 20 節において、こう言われました。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」と。

今日は、たくさん「血」の話をしてしまいました。最後に、主の十字架、イエス様が私たちのために最後にして完全な犠牲の献げ物となってくださったことを証する聖書の御言葉を読んで、説教

を終わりたいと思います。ヘブライ人への手紙 9 章 11 節から 12 節まで「けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」。私達が、神様と仲良くするために、神様に赦してもらうために和解の献げ物なんてことをせずに、ただ感謝の献げ物として、献金をしているのは、イエス様のこういう犠牲のお陰ですね。イエス様は、自ら十字架に進んでゆかれ、御自身の血によって、永遠の贖い・・・、つまり、取り消されることも、再度求められることもない、最後にして完全な赦しと救いとなってくださった。私たちが、今日も、日頃の失敗を責められることなく、この場で穏やかに過ごしているのは、このイエス様による「永遠の贖い」の目に見える結果と言えるかも知れませんね。そう思うことで、毎日に感謝の気持ちが生まれるなら、それも素敵な生き方であると思います。

主の十字架に、イエス様の流された血に思いを馳せる受難節の日々を、あとしばらく過ごして参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も何の功も無い、むしろ、間違ったり、失敗したりすることの多い私たちを、この礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。隣人を愛したいと思いつつ、それができず、和解したいと思いつつ、ごめんなさいと言えない私たちがいます。そんな私たちのために、血を流され、神様との橋渡しとして、自らを犠牲にされたイエス様のことを、今日も心に思います。心に思うだけで相応しい振る舞いにも事欠く私たちですが、あなたへの祈りが、イエス様への思いが、決して無駄ではなく、私たちの信仰を支え、隣人との関係を整え、明日の平和を守ることを私たちは知っています。どうか、この受難節の日々、主の十字架と犠牲とによって導かれてきた教会に生きる者として、私たちが感謝の思いを忘れずに歩いていくことができますように。どうかお守りください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。